

論文概要の和文様式

雑誌におけるタイトル: The Effect of Maternal Age at the First Childbirth on Gestational Age and Birth Weight: The Japan Environment and Children's Study (JECS)

和文タイトル: 初産婦において母体年齢が妊娠週数、出生体重に与える影響についての検討

ユニットセンター(UC)等名: 福島UC

サブユニットセンター(SUC)名:

発表雑誌名: Jopurnal of Epidemiology

年: 2019 月: 5 巻: 29(5) 頁: 187-191

筆頭著者名: 経塚標

所属UC名: 福島UC

目的:

日本では平均初産年齢が上昇傾向にあります。本調査では初産婦の母体年齢が、妊娠週数、出生体重にあたる影響について調査しました。

方法:

20-24歳を基準として、25-29歳、30-34歳、35-39歳、40歳以上の母体年齢群において、早産、低出生体重児のリスクがどれほど増加するか調査しました。

結果:

今回の調査では38412人の初産婦が対象となりました。母体年齢30歳以上のグループからすべての妊娠合併症のリスクが有意に増加しました。

考察:(研究の限界を含める)

今まで35歳以上の妊婦が高齢妊婦と慣習的に定義されてきました。今回の調査では30歳以上から早産、低出生体重のリスクが増加することが判明しました。このことは、高齢妊婦の定義を再考するきっかけとなるかもしれません。ただ今回得られ結果は日本人を対象としたものであります。妊娠帰結には人種差があるといわれていますので、得られた情報を一般化するには慎重な判断が必要です。

結論:

初産婦において、母体年齢30歳以上から、早産、低出生体重児のリスクが増加することが分かりました。